
浮き舟、流れ

スグル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

浮き舟、流れ

【NZコード】

N1377B

【作者名】

スグル

【あらすじ】

浮舟流、24歳。高校教師。受け持ちのクラスのせいでの、僕は教師を辞めたくなった。

1話「僕が、教師を辞めたい理由」

俺、浮舟流は24歳。

中学時代は、野球部。

あの頃、中学生とは思えない球を投げられたので、周囲からは「他の人より球速が早い人」という異名で呼ばれた。

高校時代は、剣道部。

何故、野球から剣道になったのかと言つと、入った高校に野球部が無かつた。

剣道の腕前は、2年目で副部長で副将を任されるほどの実力だ。そのことから、周囲から「やたら、副が付く人」という異名で呼ばれる。

大学では、「アニメ研究会」というサークルに入る。
何故、野球から剣道、剣道からアニメ研究会に入ったかと言つと・・・

理由なんて無い。

親からは、「目を覚まして」という異名で呼ばれた。

ちなみに、大学で過ごした4年間の記憶が何故か無い。

以上の過去を持つ俺は、今年、やつと小さい頃の夢であつた国語の教師になれた。

就職先の高校は、盗んだバイクで走り出す奴も居なく、物が壊れることもほとんどない。

フィクションには向かない高校だ。

受け持ちのクラスは、2年D組普通科。

うん、本当に普通の顔ぶれの生徒たちだ。

悪そうな奴が、いなかつた。

悪そうな奴は、大体、友達つて感じのも居ない。

だが、世の中、普通が一番危ないと言われている。

あつ、言われてないか。

現在は、6月である。

この月は、クラスの生徒たちが学校に馴れ、高校生生活をエンジョイし始めた時期。

生徒たちも教師の俺に、打ち解けてくれるようになってきた。

俺自身も教師として充実感を得はじめ、毎日を楽しく過ごしている。

・。
はずだった。。

6月のとある日。。

俺は、車で出勤している。

放課後、いつものように職員用の駐車場に置いている愛車、インプレッサの元へと歩く。

だが、今日はいつもと違う。

どこが違うかと言つと、愛車の近くに人が居る。

あれは、受け持ちのクラスの女子、新城蓮ではないか。

新城蓮は、クラスで物静かな少女。

友達は多いようだが、あまり騒がない。

彼女の自己紹介も地味だったという印象がある。

俺は、彼女に近づいてみる。

「どうした・・」

ちょっと渋めに、言ってみる。

「先生・・」

彼女が、俺の渋めの声に反応した。

うほつ・・、この娘、意外に可愛いではないか。

「俺の車に何の用だ・・」

更に、渋く言ってみる。

それにもしても、本当に何の用だ。

こんな静かで可愛い娘が・・。

と思っていたとき・・。

サツ！

「！！」

俺は驚いた。

急に、彼女が抱きついてきた・・。

まるで、レスリングの組み付きのよう。

「先生！――

と、彼女が声を出す。

細い彼女の両腕が、俺の上半身に絡みつく。

「あつ・・、えつ・・」

あまりにも突然だったので、反応できなかつた。

これって、あれか！

あれなのか！――

禁じられた恋・・、とか言うあれか！――

そんなつもりで、高校教師になつたつもりはないが・・。

ソノ発想ハ、ナカツタワ。

たしかに、生まれた年月と彼女居ない暦が同一線上の俺には夢のような状況だが・・・。

「一体、どうしたんだ！」

あくまで、この状況を冷静を押し通す。

条例といつトラップが、この現在社会にあるのだ。

うかつに、手を出すほど若くはない。

そう言つてやると、彼女がやっと俺から体を離す。

俺から離れた彼女が、下にうつむく。

すると、彼女の口が開いた。

「先生が好きなんです・・・」

そんな言葉を、彼女が言つた。

漫画やドラマの世界には、多い言葉を彼女が言つた。

俺は思わず、鼻水を噴出す。

その一言で、条例などがどうでも良くなつた。

噴出した鼻水を手で隠して、俺は彼女を見つめる。

「新城君・・・」

思わず、俺は欲望を抑えきれなくなつた。

すると、彼女が・・・。

「先生、目を開じて・・・」

そう言つ。

俺はその言葉に合わせるように、目を閉じた。

彼女は、田をつぶった俺に、なにをする気か・・・。

もしかして、唇と唇のドッキングか・・・。

今から、まさに人に教えを問う教師と、その教えを乞う生徒が接吻を交わそとしようとした。

ブルルルーン！――

東洋文庫叢書

この音

俺のインフレッサの・・・

先生、車借りますよ

その声に、思わず目を開けた。

目の前にした彼女が居なくなっている

「えつ・・・」

なにか
なんとか触りながら、た

嘘
だ
ろ
・
・
。

運軒居士 徒女九

もしかして思い、俺は自分の尻を触つてみた。

俺は叫んだ。

ズボンのケツのポケットに入れていた、インプレッサのキーがないことに気づく。

リプレイ

サツ！

俺は驚いた。

急に、彼女が抱きついてきた・・。

細い彼女の両腕が、俺の上半身に絡みつく。

「あつ・・、えつ・・」

あまりにも突然だったので、反応できなかつた。

そのせいで、彼女の手が、インプレッサのキーがある俺の尻ポケットに入つていたのに気づかなかつた・・。

あとで調べたが、彼女の家は車の整備の請負の自営業。
しかも、所謂、峠族が集まる店で、ちょっと怖い系で速さを求める
危険な方々が多く訪ねてくる・・。

そんな環境で育つた彼女は、もちろん車に好きなる・・。

しかも、彼女の親父さんは、彼女に無免許運転させていたのだ・・。

だから、彼女は、このよつた形で勝手に俺のインプレッサを借りた・・。

インプレッサは、彼女の憧れの車だつたから・・。

「ふざけんなああああああ-----！」

俺は走つた。
走りました。

無駄だつたけど、走りました。
追いつけるわけありません。

俺でも追いつける車なんて、リコール問題以前の問題です・・。

このあと、彼女はインプレッサを返してくれました。
丁寧に、レッカー車に載せててくれました。
なんて、行儀の正しい子なんでしょう。

僕は、教師を辞めたいです。

それでも、続く・・。

2話「ホラーとパリンと私」

俺のインプレッサ破壊事件は、彼女の親御さんが無料で車を直してくれるのと、彼女の親御さんが、あつち系の恐い人たちと関係あるらしいので不問にした。

彼女は、退学を免れた。

まさに、親の七光り。

一応、翌日の放課後に、教室に彼女を残し指導することにした。
「もう一度と、あんなことするなよ」

ありふれたことを言つ俺。

「はーい」

反省の色が、見えない新城。

女じやなかつたら、殴つてる場面だ。

そういうや、昨日、彼女が言つた・・。

「先生が好きなんです・・」

という言葉を思い出した。

あの言葉は、俺から車のキーを奪つたために吐いた嘘であつた。だが・・。

もしかして・・、その言葉は嘘でなかつたら・・。

と、俺は邪推した。

一応、聞いてみるか・・。

そつ判断して、すぐに俺は声を出す。

「おこ・・」

ちょっと、緊張したせいか、俺の声が震えていた。

その声に、彼女は首を向ける。

「なんですか・・・」

「えつと・・・、だな・・・。昨日・・・、俺のこと・・・」

好きって言つたよな・・・。

と言おうとした瞬間・・・。

「好きって言つたのは、嘘ですよ」

まだ言つてもいないので、すかさず言われた。

俺は、鼻水を吹いた。

ああ、嘘だと解つてたさ。

しかし、「もしかして、俺のこと好きなんじゃ・・・」と期待したさ。
するさ。

男だもん。

「ああ・・・、そうだよね・・・」

俺はガクガクしながら、彼女の間を置かない言葉に回答した。
体が意思と反して、震えまくってる。

「先生、足震えますよ・・・」

「寒いからね・・・」

「今、6月ですよ・・・」

と、的確に指摘され、俺は思わず・・・。

「うああああ――――――」

泣き出して、この場から逃げた。

もう恥ずかしくて死にそうだ。

急な大声で、彼女が引いていた。

元はといえば、この女が悪いんだが・・・。

とうあえず、小1時間、職員トイレで泣きじゅくった。

夕方になり・・・。

残業も終わり、一人暮らししてゐる自宅のアパートに帰宅して、この日の辛さを寝て忘れようかと思ったが、途中でコンビニでプリンを買つたので立ち直れた。

辛いときは、プリンだ。

これが、子供の頃からの俺式の立ち直り方だ。

甘い物が苦手な人と、虫歯の人には勧めないが。

夜も深まつた午後の10時。

ビデオ屋から借りてきた映画、「エイドリアン・ラ・プレゼンター」を、プリン食べながら観ていた。

やっぱり、ホラー映画は毛布に包まって、プリン食べながら観るに限る。

今日あつた辛くて、恥ずかしいことも忘れさせてくれる。

本当に、プリンとホラー映画を作つた人に感謝。

ピンポーン！

普段、集金でしか鳴る事のないイヤホーンが鳴つた。
しかも、こんな遅くに。

こんな遅くに、集金に来たのか。
と思っていた。

それで、俺はパンツ姿で、ドアの方に向かう。
こんな遅くに、誰だ・・。

と、イラつきながら、ドアにある小さな覗き穴を覗いてみると近づけた瞬間。

俺は、驚いた。

なんと、ドアの向こうには・・。

俺の心を弄んだ新城蓮の姿が・・。

続く

「話」「アム、空高く」

新城蓮が、俺のアパートの前に・・。

そのことに、俺は慌てて服を取りに走った。

部屋干してたズボンを履き、脱ぎ散らかしてたシャツを着る。
そして、慌ててドアに向かつた。

玄関に着いた俺は、ドア越しの新城に向かつて。

「こんな時間に、なんの用だ・・」

と言つた。

本当に、この時間になんの用なんだ。

夜に、男の部屋のチャイムを鳴らすとは・・。
彼女の口が開いた・・。

「とりあえず、部屋に入れさせてもらえませんか?」

な・に・を・い・つ・て・る・ん・だ・!・?

バカか、この女!

自分の言つた言葉の危険性が解つてるのか!?

俺は、我慢に弱い人間であり、自分の欲望に弱い。
部屋に入れたら、新城になにするか・・。

解つたもんじやない・・。

責任は持てん・・。

だから、部屋に居れられるわけないだろ!

と、五分前の俺は思つていた。

人間とは、どこかで自分の意を反してしまう生き物なかもしれない。だから、環境問題が耐えないのでだろう。

だから、リコール問題、不祥事問題が耐えないので……。

新城が、俺の部屋のお気に入りのテーブルの近くに足を崩して座っている。

「エイドリアン♪♪プレゼンターなんか観てたんですか・・・お茶か、なんか下さい」

そう、ビデオ屋の袋を手に取つて言つて居る。
しかも、お茶を要求してやがる。

以上通りに、新城を部屋に入れてしましました・・・
僕は、なんてことをしてしまったのでしょうか・・・。

17歳の女子高生を、自宅の部屋に入れてしまったのです。
言つたとおりに、僕は欲望に弱い人間だと、再実感しました。
僕は、彼女を襲つてしまふかも知れません・・・。

台所へ向かい、彼女へお茶の用意をしながら、いつかは使おうと思つていた、とある「ム製品をタンスから取り出して、ポケットに入れる。

これで、準備はオーケーだ・・。

テーブルに肘を乗せる彼女に、お茶を出す。

お茶を出しながらも、俺は、すでに戦闘態勢に入つて居る。
いつでも、出撃可能。

しかし、俺とて社会人。

とりあえず、なぜ、ここに来たかを聞かねばなりません。

「おい、なんで、俺んちに来た・・」

今更ながらに、そう言つた。

映画を流しつぱなしにしてたテレビを見ていた彼女が、こっちに顔を向けた。

その振り向いてきた表情が、少し色っぽい。

この女はどこか、そそられる・・・。

欲望のメーターが、振り切れそうだ・・・。

溢れ出そうとする欲望を押さえる俺に対し、彼女が口を開く。

「あと、数分したら、私のお父さんも来ますんで・・・」

なるほど、そういうことか。

だから、俺の部屋に入ったのか。

その発想は、なかつたわ。

俺は、彼女を部屋に置き外に出た。
大きく深呼吸を、2、3回する。
そして、叫んだ。

「意味ワカンネエえええよ――――――――――――――――――――

本当に、この女は、なにを考えている・・・。
もう少ししたら、彼女の親父が部屋に来る・・・。
そう思いながら、ポケットに入っていたゴム製品を俺は空高く投げ
捨てた。
宙に舞うゴム製品に、少しロマンを感じる俺は死すべきであらいつも
ののか・・・。

うるべ
・
・
。

4話「爆音が」とく

宙に舞うゴムに、ロマンを感じている時・。

ブオオオオオオオオーーンンンンー――――――――!

耳に風穴開けられそうなくらい、つるさじエンジン音が聞こえて来た。

こんな遅くに、馬鹿みたいに車を吹かす奴がいるか。かなりの近所迷惑。

どんだけ頭の悪い不良だ。

と思つた時・。

うるさいエンジン音が、心なしか一層大きくなつて来た。こっちに近づいて来る様な感じがする。

まさか・。

まさかが、的中した・。

うるさいエンジン音を放つスカイラインが、俺のアパートの前に出現した・。

直に聞くと、本当にうるさい・。

爆音のスカイラインが、俺んちの前に停車した。

俺の頭の中は、嫌な予感で一杯だ・。

うるさいスカイラインのエンジン音が、やつと止まつた。

あの新城蓮が、俺に近づいてから最悪だ・。

なんで、じんなひどい目に遭うのだ・。

子供の頃、一回も、万引きをやったことがないのに。

あつ、一回したことあるわ・。

予想通りに、バカうるさいスカイラインに乗つて来たのは、彼女の親父さんでした・。

そして、現在、俺の部屋でタバコを吸つてている。

俺は、またお茶の用意をしている・。

なんて、態度のでかい親父さんだ・。

顔に深い傷があるや。

あれは、落書きか。

あの親父さんの放つオーラ力は尋常ではない。

きっと、一公務員の俺では想像の出来ない修羅場を体験してきたのだろう・。

だから、俺には、あの親父さんに・。

タバコ吸うな、車うるさいねん、あなたの娘は、
「ハードラックと踊つてるんじゃない」
か、あなたの娘萌えー。

などと、言えるわけがない。

それにもしても、あんなゴツツイ親父から、あんな娘が生まれるもの

なのか・。

俺は、親父さんにお茶を出して座つた。

「おおつ、先生、悪いですな
と、『ゴツツイ親父さんが』言つ。

この親父・・・タバコを、人のテーブルに押しつけて消してゐ・。
しかも、吸い殻をテーブル置きっぱなし・。
そんな親だから、彼女もこうなのが・。

あつ、あの小娘、いつの間にか、テレビのチャンネルを変えやがった、ちきしそう。

お茶を片手に、親父さんは、例のインプレッサの件を話し始めた。

「昨日は、すいませんなあ・・・」

一応、謝罪してくれた。

ちょっと嬉しい。

壊した本人の娘は、俺のベッドの上で横になってるぞ。

親父さんが来なかつたら、俺が仰向けに倒してやつたの。」

どうやら、この親子一人は謝罪に来てくれたようだ。

そういうことだつたら、予め連絡して欲しいわ。

「あつ、いえ、気にしていませんよ・・・」

本当は、気にしてるが、この親子には立ち去つてほしいので流すよう言つた俺。

「これ、お詫びのもんですわ・・・」

と、言って親父さんが、持つてきたケーキの箱を渡してくれた。

ちょっと、これは予想外。

「あつ、すいません」

俺は、ケーキの箱を受け取つた。

なんだ、いい人じやないか・・・。

と、俺は思った。

すると、俺がケーキを受け取つたと同時に、親父さんが立ち上がつた・・・。

「ほな、帰るぞ」「はーい」

えつ！？

彼女も立ち上がった。

えつ、帰るだと。普通、ここから少し話をしたり、俺が娘さんに注意したりする場面ではないのか。

ちょっと、マナーとして、おかしいぞ。

俺は、車壊されて、ケーキ受け取つて終わりかい。
そう思つてゐる隙に・・。

「おじや ました

バ力親子一人が、部屋から颯爽と出て行く。

啞然として、俺は、口を開けたまま、一人を見送つた・・。

勝手に車を壊され、勝手に部屋に入れられ、勝手に謝罪して帰る・・。
まさに、外道！

.....

また、あのうるさいスカイラインのエンジン音が聞こえてきた。

たぶん、ここから去つたのだろう。

俺は、あの一人の常識のなさに金縛り状態だ。

とりあえず、ケーキの箱を開けてみる・・。
ショートケーキ、一切れだけだった。

俺は、思つた。
教師やめよう。

つづく

5話「ダメなものは、所詮、ダメなんだよ」

翌日、俺は校長室に居る。

中年太りの校長が机に体重を掛け、椅子に座る。

その校長の目の前に、俺は立つ。

「どうしたんだね、浮船君・・・」

という校長の問い合わせ来た。

それに対して、俺は・・・。

「今日限りで、学校を辞めさせてもらいます・・・」

と、大声で叫んだ。

その声は、校長室全体に旋律の美しい調べの「」とく響く。

更に、勢いで校長の机に辞表を叩きつけた。「それでは、お世話になりました・・」

校長が状況が読めていないのに、そのまま、俺は校長室を立ち去る。昨日のあの一人のバカ親子が来たときの俺も、こんな感じだったのだろう。

もう新城の顔を見るのも嫌だつたから、受け持ちのクラスに一言も別れを言わずに立ち去ることにする。

自分勝手過ぎるとは思つてゐるが、そんなことが、どうでも良くならへば、昨日の件に腹を立てていた・・。

しかし、辞めるにしても・・、いきなり過ぎたな・・。
と、少し反省してしまつたのが、俺の良心なのだろうか。
というか、これが普通の感覚なのだろうか。

それから、1年の暇な日々を過ごし、俺は都心から離れ、とある島に住んでいる。

あの事件があつても、教師の夢を捨てられずに居たため、この島の小さな小学校の先生をやつている。

この学校の生徒は、少ない。

だが、俺はこの少数の子供達と、日々向かい合つて生きている。

毎日が、体当たり。

だけど、俺は、とても充実していれる。

辛いときもあるが、あのインプレッサ大破事件を思えば辛くなくなる。

そういう意味では、あの女に少し感謝せねば・・・。

いや、やっぱり、感謝はしない・・・。

そして、ここに暮らし始めた。···

さすがに、あの事件は、もう忘れた。

俺も、氣づけば32のオッサンだ。

歩くたびに、周囲の人々から暖かく見守られ、

「先生、おはよっございます」

と、日々挨拶される。

都会にいた頃、こんなに優しく挨拶されたことはなかったであらうか···。

今日は、實に日差しが眩しい。
なんか、いいことがありそうだ。
そんな予感で、頭がいっぱいだ。

世の中は、嫌なことだらけだ。

俺の場合は、嫌なことから逃げた。

だが、逃げるが勝ちと言つ言葉がある。

逃げることによって、人は新しい自分の道を見つけることが出来る。

それを、俺は証明した。

だから、今、とても充実している。

そう思いながら、俺は学校への道を歩く。

しかし、所詮、現実は小説より奇怪なり。

この後、俺は自分の認識の甘さに泣く。

新しい居場所だと信じた学校には、なぜか、新任の教師になつた新城蓮が居る。。

所詮、世の中はダメなものはダメだ。

完

5話「ダメなものは、所詮、ダメなんだよ」（後書き）

かなり中途半端で、些末な作りになってしまったことをお詫びします。
す・す・す。物語を破綻させてしまった自分の力のなさを憎むばかりです。
す・す。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1377b/>

浮き舟、流れ

2010年10月28日05時39分発行